

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院学生研究
2025年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院			文学研究科	史学専攻
研究代表者 (2026年3月現在 のものを記入)	在籍課程・学年		氏名		
	☐ 博士前期課程 年 ☒ 博士後期課程 3 年		殷 慈 璟		
指導教員	所属部局・職名		氏名		
	文学部・教授		四日市 康博		
自然・人文・社会の別	自然	・ 人文 ・	社会	個人・共同の別	個人 ・ 共同 名
研究課題	璽珞をはじめとするユーラシアの宗教装飾に見られる美術史・仏教史・社会史的研究				
研究組織 (共同研究者が いる場合のみ、 2026年3月現在 のものを記入)	在籍研究科・専攻・課程・学年		氏名		
研究期間	2025 年度				
研究経費 (1円単位)	(支出金額) 200,000 円 / (採択金額) 200,000 円				

研究の概要 (200～300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)
当該研究の研究目的を含むこと。
本研究では、まず、漢訳仏典や漢文史料に登場する「璽珞」という語の考察を各経典・史料ごとにおこない、それぞれの相互関係を分析する。次に、サンスクリット語などの非漢語原典における「璽珞」との対応箇所を考察し、「璽珞」の概念の創成とその派生、時代によってその概念範囲がどのように変化したのかを分析する。このように、「璽珞」の概念変遷を追うことで、仏教の思想的展開や訳経に際するパーセプション・ギャップの一端を窺い知ることができるであろう。また、仏像や天蓋など仏教美術に見られる璽珞装飾を美術史的観点から考察し、璽珞の意匠がどのように発展し、時代や地域ごとにどのように受容され、影響を与えてきたのかを明らかにする。さらに、宗教・美術における慣用にとどまらず、「璽珞」とその意匠は仏教以外の宗教をも含む支配者層・民衆社会に受容された。なかでも、世俗の装身具としての璽珞や、服飾に見られる璽珞装飾、陶磁器をはじめとする工芸品の璽珞文様も並行して考察対象とし、こうした仏教の枠を超えた文化的コードとしての璽珞を研究することによって、政治・社会・文化の時代による変遷や、宗教を含めた文化の伝播と受容の実態を見てゆきたい。
キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)
[璽珞] [宗教装飾] [仏教経典]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

以下の視点を含めて記載のこと。

- ・当該研究は何をどこまで明らかにできたのか(できなかったのか)。
- ・何をもって研究成果(経過)を達成できた(できなかった)と考えられるのか。
- ・自身が設定した研究目的・目標に照らして、その根拠がわかるよう記載のこと。

本研究では、瓔珞の概念や意匠がどのように発展し、地域間においてどのように受容・変容されてきたのかを、美術史・仏教学・歴史の各分野を横断的・包括的に考察することで、瓔珞をめぐる装飾文化の歴史的意味の変遷を明らかにすることを目的としている。

① 漢訳仏典に関する研究成果

漢訳仏典における「瓔珞」の用例研究については、雑誌論文「初期漢訳仏典における「瓔珞」について」(『史苑』第 86 巻・第 2 号、2026) として成果を公表した。

本論文では、鳩摩羅什の訳経活動以前、すなわち後漢から西晋にかけてのいわゆる古訳時代を中心とした初期漢訳仏典に登場する「瓔珞」に焦点を当て、とりわけ訳経の最初段階における「瓔珞」の用法、特徴、その概念範囲について考察した。

その結果、「瓔珞」は後漢時代の漢訳仏典にすでに見られ、遅くともこの時期には一定程度定着した語であったと考えられる。その語形は多くの場合、「珠」「宝」などの語を伴い、珠玉・宝石を連ねた装身具を基本的意味として用いられるが、訳経者や文脈によって表現の揺れが見られる点も特徴的である。

意味内容としては、主として装身具を指すものの、その着用者は出家前の釈尊、諸菩薩、天人から王族、庶民(世俗人物)に至るまで広範に及び、修行段階にある存在、すなわち広義の「菩薩」に関わる属性として理解することができる。また、その着用部位は主に頸部、あるいは頭から足に至る全身とされる。

一方、仏典における「瓔珞」は単なる装身具にとどまらず、仏国・浄土の樹木や仏塔、建築物に掛けられる垂飾、あるいは持物としても用いられ、さらには「莊嚴する」、「飾る」に等しい動詞的用法も確認される。加えて、「菩薩の四瓔珞莊嚴」に見られるように、修行や徳行を象徴する抽象的概念としても展開している。

さらに、經典中には「瓔珞を雨ふらせる」、「瓔珞を散じて供養する」といった定型の表現が頻出し、瓔珞は供養・発心・瑞応と結びつく宗教的象徴として機能している。特に、散じられた瓔珞が天蓋などに変化する描写や、瓔珞の垂れ下がった姿が幡に比される事例は、莊嚴具としての性格と密接に関係している。

以上より、「瓔珞」は珠玉を連ねた装身具を基盤としつつ、垂飾・持物・動詞・象徴概念へと展開する多義的概念であるといえる。なお、初期漢訳仏典の考察結果を見る限りでは、装身具としての瓔珞は、広義の「菩薩」が身につける珠玉・宝石を連ねたものであり、その着用部位は主として頸のみか足に至る広い範囲である。この点から考えると、日本の研究において、頸や胸にある短い装身具を「頸飾」あるいは「胸飾」と呼び、長い装身具だけを「瓔珞」と呼ぶ慣習は美術史分類的には有用かもしれないが、元来の仏典の概念範囲には即していないように思われる。そういう意味では、むしろ中国における研究のように、装身具の長短にかかわらず、頸や胸から下げる飾りを一括して広義の「瓔珞」として扱う方が仏典の記述に忠実であり、本来の瓔珞の概念範囲に近いといえるだろう。

今後、以下の論点について、さらに検討を進める必要がある。まず、古訳時代から旧訳時代、新訳時代、すなわち、初期漢訳仏典から後代の大乗仏典、密教經典に見られる「瓔珞」について、その用法や意味に連続性や変化は見られるのか。また、漢訳仏典とサンスクリット語をはじめとする原典の「瓔珞」表現にはどのような対応関係があり、それは漢訳仏典や仏像表現にどのように影響しているのか。さらに、漢訳仏典中の「瓔珞」の表現の違いや変遷は実際の仏像・装飾や社会・文化にどのように反映していたのか、また逆に、仏像・装飾の変遷は後代の漢訳仏典に出てくる「瓔珞」の表現にどのような影響を及ぼしたのか。以上について、解明を目指したい。

② 仏教美術に関する研究成果

本研究の一環として、奈良・大和における実地調査に基づき、飛鳥・奈良時代の仏像に見られる瓔珞の様式について検討をおこなった。その成果の一部は「奈良大和路の仏像に見られる瓔珞の様式—飛鳥・奈良時代を中心に—」(『なじまあ-Accessible Asia-』15 立教大学アジア地域研究所の年報、2025) をとして論考を発表した。

飛鳥・奈良時代の仏像に見られる瓔珞の様式変遷を整理した結果、七世紀前半には金銅・木彫像ともに共彫による盤状の短瓔珞が主流であったが、後半には別材製への移行とともにその形式は次第に消失し、短・長瓔珞を組み合わせた多様な様式が展開することが明らかとなった。八世紀前半には素材や技法の変化に伴い、短瓔珞は唐草や果実状垂飾を伴う複雑な構成へと発展し、一方で長瓔珞の様式は統一を見ないまま多様化した。

研究成果の概要 (つづき)

八世紀後半には木彫像への回帰とともに、別材製の璽珞(多くは亡失)と共木の璽珞が併存するが、全体としては短璽珞を中心とする構成が主流となる。しかし、平安時代に入ると、木彫像が中心となり、璽珞の様式は全く異なる新たな段階に入ることになった。

璽珞の様式の画期に関する議論は主に日本国内と中国の研究で別々におこなわれてきたわけであるが、両者に相関性が全くないとは考えられない。今後の課題としては、飛鳥・奈良時代の仏像璽珞に続き、平安・鎌倉時代の璽珞を調査して分析をおこなう。中国大陸(南北朝・隋唐)や朝鮮半島から日本への影響がどのようなものであったのか、また、和様化したとされる平安時代以降の璽珞に中国様式の影響は及んでいなかったと言えるのか、さらなる検討を進めてゆきたい。

③ 遼代の文化史に関する研究成果

第 26 回遼金西夏史研究会大会(2026 年 3 月、京都大学)における発表「遼代の璽珞—副葬品、陶磁器、菩薩像—」では、遼代における璽珞の展開について、副葬品・陶磁器・仏像という複数の資料群を横断して分析した。主に墓葬出土の頸飾および陶磁器に見られる璽珞文を対象として、その概念および仏教や仏像装身具としての璽珞との関係性について再検討をおこなった。

まず、「璽珞」という語は仏典漢訳の過程で生み出された仏教語であり、従来は主として仏像、とくに菩薩像の装身具を指すものとして理解されてきた。しかしながら、漢文史料の用例を検討すると、唐代以前においては、「璽珞」は主に南海・西域諸国の世俗人物が着ける装身具を記述する語として用いられ、中原地域の人々が自らの装身具を「璽珞」と呼ぶ例はほとんど確認されない。

一方、『契丹国志』や『遼史』には「璽珞」という語の使用は確認されないものの、『旧五代史』や『宋会要輯稿』には、遼・契丹に関連する「璽珞」の記述がいくつか確認できる。とりわけ、『宋会要輯稿』における「璽珞」の記述は宋と遼の間の外交儀礼に関わる贈答品の記録に由来するものであり、「璽珞」が遼から宋へ送られた公式贈答品の一つとして登場していることが明らかとなった。以上より、五代・宋・遼に至って、「璽珞」は支配層の装身具を指す語として用いられるようになったと考えられる。

次に、遼墓出土の頸飾を分析し、その構成形式に基づいて三類に分類した。その結果、単一材質の珠を連ねた数珠状の頸飾や、管形飾・金属球などを組み合わせた形式は、仏教造像以前の北方遊牧民族の装身具にも遡る可能性が高く、必ずしも仏像璽珞に直接由来するとは言えないことが明らかとなった。一方、複数連を束ねた花綱状の構造をもつ頸飾については、仏教造像が盛んになる以前には確認されないため、仏像璽珞との関連が示唆される。

さらに、遼代陶磁器に見られるいわゆる璽珞文について検討した結果、こうした縦に配列された連珠を基本とする垂飾状の文様は主に盤口長頸の穿帯瓶など特定の器形に施され、契丹社会の生活様式や装飾意識を反映したものである可能性が高いことが明らかとなった。他方、穿帯瓶に見られる璽珞文は北朝以来の菩薩像璽珞によく見られる円形・楕円形の連珠飾と類似し、さらに仏具の浄水瓶にも同様の文様が確認されることから、仏教および仏像璽珞との関連性も否定できないと考えられる。

以上の検討から、遼代における頸飾および陶磁器の璽珞文は、多様な文化的背景のもとに形成された複合的な産物であると結論づけられる。したがって、これらを一律に仏教的な「璽珞」として理解することには慎重であるべきである。今後は仏教美術のみならず、考古学・物質文化史の視点を含めた総合的な比較研究が求められる。

研究発表 (研究によって得られた研究成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。なお、成果発表を確認できる資料を合わせて研究成果報告書提出フォームより提出してください(紙媒体等、研究成果報告書提出フォームから提出できない場合は、別途リサーチ・イニシアティブセンターへ提出してください)。

①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

※修士論文・博士論文は含みません。

① 雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)

殷慈環、「初期漢訳仏典における「瓔珞」について」、『史苑』、第 86 巻・第 2 号、2026 年 3 月、pp. 55-94

② 図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)

該当なし

③ シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)

該当なし

④ その他(学会発表、研究報告書の印刷等)

<学会発表>

① 殷慈環、「遼代の瓔珞一副葬品、陶磁器、菩薩像」、第 26 回遼金西夏史研究会大会、京都大学、2026 年 3 月 21 日

② 殷慈環、「瓔珞の総合的研究—仏典・仏像・陶磁器における概念と図像の展開—」、2025 年度立教大学文学研究科院生研究発表会、立教大学、2026 年 1 月 22 日